

7価肺炎球菌ワクチンの 保育園児上咽頭検出菌におよぼす影響

伊藤 真人 吉崎 智一

金沢大学 耳鼻咽喉科・頭頸部外科

我々の過去10年間の調査では保育園児の75～90%が肺炎球菌を、80～95%がインフルエンザ菌を保有しており、さらに保育園児から検出される肺炎球菌のほぼ全て、インフルエンザ菌の約80%が遺伝子的耐性細菌であった。このような保育園内感染がOtitis proneの発症につながっている。我々の調査によるとOtitis proneと診断された乳幼児に占める保育園児の割合は75%であり、さらに兄弟が保育園に通園している児を含めると実に約97%が保育園との関わりをもつ乳幼児であった。2010年3月に7価肺炎球菌ワクチンが我国でも使用可能となったが、同ワクチンの耐性肺炎球菌血清型カバー率は78%といわれ、以前から定期接種を行っている海外の報告では、ワクチン接種によって難治化によって鼓膜チューブ挿入に至る症例を25～40%減らすことができたとされている。一方で、ワクチン血清型以外の菌株への交替現象も報告されている。今回、7価肺炎球菌ワクチン導入前と比べて、保育園児の上咽頭検出肺炎球菌の検出率や血清型、耐性率に変化が見られるか否かを検討したので報告する。その結果、7価肺炎球菌ワクチン接種開始後1年目における接種率31.5%（2歳以下では43%）の段階で、肺炎球菌検出率74%と不変であり、また依然として検出された肺炎球菌の全てが耐性遺伝子をもつ菌であった。しかし、接種開始前には76～86%を占めていたワクチン血清型が25%に減少しており、さらにワクチン血清型が検出された11例中10例がワクチン未接種児であった。このことから上咽頭にコロニー形成する肺炎球菌に対しても、ワクチン血清型肺炎球菌の除菌効果は大きいものと考えられた。しかし菌交代現象も観察されることから、Otitis prone発症頻度の変化も含めて今後の動向が注目される。